聖霊降臨後第７主日（特定１２）　　妥協せず願うこと　　２０２５．７．２７．

今日の聖書の箇所、特に旧約と福音書は、わたしたちに、祈ること、というよりも、願うことには、もっとしつこさ、粘りみたいなものが必要ではないか、ということを教えているように思います。

先ず、福音書の方ですが、イエス様の弟子たちが、祈りを教えてほしいと頼むと、イエス様が主の祈りを教えられました。私たちが普段使っている主の祈りは、マタイによる福音書に書かれているものですが、このルカによる福音書にも、マタイより短い、簡潔な主の祈りがあるのを憶えておいてください。

ただ、今日の注目点は、そのあとに、真夜中、友達のところへ、パンをもらいに行く話です。最初は、旅行中の友達が自分の所に立ち寄ったが、出すものがない、と、事情を説明して、パンをもらおうとするのですが、そんなことでは、もう床に入って寝ている友人は、なかなかパンをくれない。しかし、友達だからというのではなく、しつように、ドンドンと、音を立てて頼めば、相手が根負けして、願いをかなえてくれる、という話です。

だから、根気強く、求めれば与えられ、探せば見つかり、門を叩けば開かれる。悪い人間の父親でも、自分の子どもには、よい物を与えるのだから、まして天の父なる神様は、聖霊を与えてくださるんだ、とイエス様は教えられました。

このことの例にあたるのではないか、と思いますが、今日読んでいただいた旧約は、神様が、ソドムの町を滅ぼそうとして向かわれる時の出来事です。みなさん、よくご存知でしょう。アブラハムは、自分の甥のロト一家が住んでいるソドムの町を救いたくて、「あのソドムに５０人の正しい人がいたら、その正しい人を、悪い人と一緒に滅ぼすのか、あなたは世界を裁く方だから、正義を行うべきじゃないですか。」と、堂々と神様に掛け合います。ひとつの祈りと言うか、願い事ですね。しかし、５０人という数字に自信が持てなくなり、彼は、４５人、４０人、３０人、２０人、最後は１０人まで下げてしまいます。

よくまあ、そこまで食い下がったなあ、と、アブラハムの交渉の粘り強さに驚くのですが、それでも、どうしてそこでやめてしまうのか、疑問を持ちます。甥のロトだけは当てにできるから、最後の１人まで、交渉をするべきだったのではないか、という意見を聞いたことがあります。

ここでちょっと、話が外れますが、創世記についてのユダヤ教の本を学んだ時、おもしろいことが書かれていました。どうして、アブラハムは１０人でやめたのか。これについて、ユダヤ教では、創世記のアブラハムより前の人物。箱舟を造ったノアのことを例に挙げて説明していました。

ノアの箱舟に入った人数は何人だったでしょうか？ノアと息子三人。それにそれぞれの連れ合い。合計８人でした。８人の正しい人がいても、神様は世界に洪水を起こして、人々を滅ぼしてしまった。だから、１０人が限界だった。８人居たって、滅ぼされたことをアブラハムは思い出して、１０人が限界だと悟って、そこでやめた、ということを書いていました。

話を続けて、もっとしつこく頼めばよかったのに、という問題に戻して考えます。このことについて、聖書の別のところで、思いつくものはありませんか。

私は、以前紹介したことがあるかと思いますが、イエス様よりも７００年くらい前の時代、イスラエルは南北に分裂し、北の国は滅ぼされ、南ユダ王国だけが何とか生き延びていた時代のことです。エルサレムには、ヒゼキヤという立派な王様がいました。城壁に囲まれたエルサレムの町の中へ、外からトンネルを掘って、水道を引くという大工事を行ったこともありました。ところが、その後、病気にかかってしまいました。列王記下２０章、旧約６１４ページに出てきます。彼は死の病にかかり、彼に仕えていた預言者のイザヤは、「主はこう言われる。『あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから。家族に遺言をしなさい。』」と言いました。しかし、ヒゼキヤ王は、死にたくなかったので、「ああ、主よ、わたしがまことを尽くし、ひたむきな心を持って御前を歩み、御目にかなう善いことを行ってきたことを思い起こしてください。」と言いますと、神様は、１５年寿命を延ばしてくださったのです。

ところが、その後、東の国のバビロニアの首都バビロンから、ヒゼキヤ王に見舞い客がやってきました。ヒゼキヤ王は、バビロンからの見舞い客を歓迎して、南ユダ王国が蓄えていた財産をすべてその客に見せました。すると預言者イザヤは、ヒゼキヤが行ったその行動が、やがて、ヒゼキヤの子孫たちの時代に、バビロニアから軍隊がその財産を目指して攻めてきて、その財産を何も残らず、バビロンへ運び去られ、子孫が捕囚になる時代が来る、と批判しました。

ヒゼキヤ王は、また預言者のイザヤから、嫌な預言をされたのですが、彼は、「何とかして、そんなことが起こらないようにしてほしい。」とは、この時願いませんでした。

何と言ったでしょうか。
「あなたの告げる主の言葉はありがたいものです」と答えた。と言うのです。どうしてでしょう。

その理由が続きに書かれています。
「彼は、自分の在世中は平和と安定が続くのではないかと思っていた。」とあります。
自分の時代が何とかなれば、子孫の時代は、どうなってもいい、という考え方です。

実は、この考え方は、私たちの中に、しばしば起こってくる考えではないでしょうか。日本のバブルに浮かれた時期はずっと前に終わったのに、この３０年余りの間、国の経済が傾き、また国民は大変貧しくなったのに、現代のヒゼキヤ王のような政治家や一部の資本家など、特権階級の人々、あるいはもう寿命も長くないから、あとは野となれ、で後世に大きな負債を残している。

しかし、私たちは、もっとしつこく、神様に要求し、妥協せずに、よいことを願い続ける努力が必要なのではないか。自分の生活が何とかなるなら、ソドムの町が滅ぼされても仕方がないか、夜中に旅の友人が来て、空腹でも、自分のことではないから、仕方がないか、そうじゃないだろう。
今いる仲間だけでなく、周りの国の人々、自分より後の時代に生きる人々。そのような隣人のために、私たちは、もっと粘り強く願い、行動することが、求められているように思えるのです。
（　ここで資料提供です。後の世代のために、という意識を持ったアメリカ先住民の酋長の言葉です。）

（参考付録文書）アメリカ北西部にあるワシントン州の都市、シアトル。シアトルという名前は、この土地の先住民族、ドゥワーミシュ族（Duwamish）のシアトル酋長(Si’ ahl, “Chief Seattle” 178?-1866)の名前に因んでいます。200 万エーカーの土地を 15 万ドルで買い取りたいというアメリカ連邦政府の申し出に対するシアトル酋長の返事は、何通りかに伝えられているそうですが、どれも心に響く言葉です。1854 年にスクアミシュ族(Squamish)の保留地へ移住させられる間際の言葉だそうです。 シアトル酋長が条例に署名したのは 1855 年です。

ワシントンの大首長から我々の土地を買いたいとの申し入れがあった。我々にとって聖なる地なので簡単なことではない。どうやって空や雨や風を買おうというのか。そのような考えは我々には馴染みのないことだ。澄んだ空気や水の輝きを所有しているわけではないのに、どのようにそれらを買うことができるのだろう。この土地の全てが我々にとって聖なるもの。どの砂浜も、輝く松の葉も、深く暗い森のどの霧も、どの草原も、羽音をたてる虫も、全てが我々の記憶や経験の中でとても聖なるものなのだ。私の体の中に血が流れるように、木々の中を樹液が流れている。小川や川を流れる輝く水は単なる水ではなく、我々の祖父たちのそのまた祖父たちの血である。空気はとても大切なものだ。空気が養う全ての命にそのスピリットが分け与えられる。私の生まれて初めての息を与えてくれた風は、私の最後の吐息を受ける。我々は地球の一部であり、地球は我々の一部である。岩が切り立つ山の頂、草原、馬、全ては同じ家族の一員である。香りたつ花は我々の姉妹である。熊や鹿や大鷲は我々の兄弟である。川のせせらぎはあなたのおばあさんのそのまたおばあさんの声である。澄んだ湖の水面に映るぼんやりとした反映ひとつひとつは我々の人生の思い出を語ってくれる。川は我々の兄弟である。我々の渇いた喉を潤してくれる。我々のカヌーを運んでくれる、我々の子供達に食べ物を与えてくれる。兄弟を思いやるように川に対する思いやりを持たなくてはならない。世間におけるくもの巣のように絡み合った関係「ウェブ」は人がつくったものではない、人はその中の一本の糸にしかすぎないのだ。人がその「ウェブ」になすことは、その人自身になすことになる。あなた達の運命は我々には理解できない。白い人たちは我々の習慣を理解していないということは分かっている。白い人たちにとって土地のある一部は、次の一部と同じである。見知らぬ人が夜中にやってきて、必要なものなら何でも持って行く。土地は白い人たちの兄弟ではなく敵である。征服すると次に移っていく。父親の墓は置き去りにし、気にもしない。自分の子供達から土地を奪い、気にもしない。父親の墓も子供達の生まれたときから持っている権利のことも忘れてしまっている。母なる大地や兄弟である空を、買ったり略奪したりするものや、羊や輝くビーズのように売るものとして扱い、欲求が大地をむさぼり滅ぼし、砂漠だけを残し、自分の寝床を汚染し、自分が作り出した廃物によって苦しむであろう。バッファローがすべて殺されてしまい、野生馬がすべて飼いならされてしまったらどうなるのだろう。森の中の秘密の場所に多くの人の匂いがたちこめてしまったときには、丸い丘の景色が電線で汚れてしまったときには、何が起きるのだろう。これらのことは、我々が大地を走る馬と狩猟に別れを告げると共に起きる。最後の赤い人の男たちと女たちが、人の手の加わっていない土地とともに消え去っていくと、彼らの思い出は大草原の上を流れる雲の影だけとなる。海岸や森林はまだあるであろうか。我々の魂はまだ残っているだろうか。生きているものの最後であり、生き残ることの始まりである。赤ん坊がお母さんの心臓の鼓動を愛すように我々はこの大地を愛している。我々がこの土地をあなた達に売るならば、我々が愛したようにこの土地を愛してほしい。我々が大切にしたように、大切にしてほしい。この大地を受け取ったときの状態を覚えていてほしい。子供達のそのまた子供達のために、土地や空気や川を保護し、我々が愛したように愛してくれ。大地は我々の母である。大地に起きることは、大地の息子達や娘達にも起きる。